

論文の内容の要旨

論文題名 〈文字〉としての映像——テオドール・W・アドルノの映像メディア観の変遷
氏名 竹峰 義和

(4000字)

本論文は、テオドール・W・アドルノ (1903-1969) が、映画をはじめとする映像メディアについておこなった思弁的考察の変遷の軌跡をそのコンテキストとともに辿っていくなかで、アドルノが複製テクノロジーに基づく映像メディアを必ずしも否定的に評価していたのではなく、そこに「文化産業」の概念に還元されない批判的潜勢力を見ていたという事実を立証する試みである。

新しいメディアの受容という点に関して、一般にアドルノは、映画とその観客大衆のうちに美学的・政治的解放力を見て取ったベンヤミンとは逆に、テクノロジーの発展が芸術におよぼすものの意義を決して認めず、芸術美の内在的・自律的価値に終生固執しつづけたと見做されている。しかしながら、レコード、ラジオ、映画等の複製技術メディアについてアドルノが論じた諸々のテキストには、芸術の技術化・画一化の傾向に対する辛辣な批判やエリート主義的な抗議がある一方で、それに混在するようなかたちで、諸々の新たなメディアに媒介された芸術のポジティブな可能性を積極的に認め、新たなメディア美学というべきものを萌芽的ながらも展開している箇所が少なからず見受けられる。本論文は、アドルノの多岐にわたるメディア分析を年代順に置き直し、それら相互の理論的関連を明らかにすることによって、アドルノの大衆メディアへの肯定的評価がけっして一過性のものでなく、その思考の内的な必然性から生ずるものであることを検証する。

このような課題に取り組みにあたって、本論文がアドルノの哲学・美学・社会理論とメディア論とを繋ぐ導きの糸とするのが〈文字 (Schrift)〉という概念である。もともとこの概念は、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』(1923-25) に由来するものであり、そのなかでベンヤミンは、ドイツ・バロック悲劇のアレゴリー的な表現様式と世界観の核心をなすものこそが〈文字 (Schrift)〉にほかならなと規定している。若きアドルノが、このベンヤミンの議論から決定的な影響を受け、〈文字 (Schrift)〉をみずからの哲学的思考の核に据えたことは、『啓蒙の弁証法』(1939-44) や『否定弁証法』(1961-66)、

さらには『美学理論』(1961-69)といった主要著作において、この概念に決定的な意義が付与されていることから明らかである。しかしながら、アドルノにとって〈^{ヴェリゾ}文字〉がもつ射程は、たんに哲学や美学の領野にとどまるものではない。すなわち、既に30年代からアドルノは、〈^{ヴェリゾ}文字〉という概念を、レコードや映画といった複製技術メディアに積極的に応用し、メディア映像を一種の〈^{ヴェリゾ}文字〉として捉えるという独自の議論をおこなっているのである。ただし、アドルノの映像メディア論のなかで、この〈^{ヴェリゾ}文字〉という形象は、深いアンビヴァレンツを孕んでいることに注意する必要がある。すなわち、一方においてアドルノは、支配機構によってメディア映像のなかに組み入れられたイデオロギー的なメッセージを〈^{ヴェリゾ}文字〉と呼んでいるのであるが、他方において、メディアが呈示する映像を〈^{ヴェリゾ}文字〉としてアレゴリー的に読解することのうちに、文化産業のシステムを批判的に超越するユートピア的な地平を知覚・認識する可能性を認めるのである。本論は、こうしたアドルノの大衆メディアをめぐる認識の弁証法的な揺らぎを、「レコードのフォルム」(1934)から「大衆文化のシェーマ」(1942)、『映画のための作曲』(1943-44)、「テレビ序論」(1953)を経て、晩年の「映画の透かし絵」(1966)に至るテキストを、〈^{ヴェリゾ}文字〉という形象を手掛かりとして検証・読解することによって、アドルノの映像メディア論のもつ理論的な射程が明らかにされる。

また、本論文は、一般に流布しているイメージとは異なり、アドルノの映像メディアをめぐる思索が、大衆文化の実情から遊離した抽象的思弁の産物ではなく、具体的な知識と経験に裏付けられたものであること、そしてさらに、映像メディアの批判的可能性をめぐるアドルノの議論が、たんなる理論的省察の次元にとどまることなく、現実社会への実践的な介入という契機もその射程に収めていたという事実を明らかにする。とりわけ、1941年末に移住した南カリフォルニアにおいてアドルノは、ハリウッドの映画人たちと親密な交友を重ねるなかで映画製作の実情について知見を深めていた。そして、その成果がとりわけ『映画のための作曲』に反映されているのであるが、ここでは、映画音楽の変革プログラムを提起するなかで、ハリウッドの映画撮影所の中核において文化産業の物象化されたシステムにたいする「ゲリラ戦」を遂行していくための方策として、さまざまな具体的提言もなされているのである。本論文では、そのようなアドルノの映画音楽論における実践的な契機がたんなる一過性のものではなく、その哲学的思想から内在的に生じたものであることを立証するべく、1930年代から60年代にかけてのアドルノの芸術およびメディアをめぐる思考を再構成することが試みられるが、そこから浮かび上がるのが、アドルノの美学理論のもつ多元性である。すなわち、とりわけ『新音楽の哲学』などのテキストにおいてアドルノが、現実から完全に孤絶した状態において社会の諸矛盾をモナド的に表象する「投壘通信」としてのモダニズム芸術作品をめぐる秘教的な芸術思想を練り上げたことは広く知られているが、その一方で、「音楽の社会的状況によせて」(1932)や『映画のための作曲』、「映画の透かし絵」、そして『美学理論』のなかにおいて、大衆の意識に能動的に働きかけていくなかで、人々が〈非同一的なもの〉の存在をみずから感覚・経験することを可能とするような〈知覚媒体〉としての芸術作品というヴィジョンが打ち出されていたのである。そして、本論文が何よりも注目するのが、アドルノの認識のなかで、その

ような〈知覚媒体〉のうちには、シェーンベルクの音楽のような高級芸術だけでなく、映画をはじめとする大衆芸術の数々もまた含まれており、「ショック」・「ウィット」・「モンタージュ」・「笑い」・「道化的なもの」といった諸契機が、〈非同一的なもの〉への知覚の回路を拓くための鍵概念として、アドルノによって重要な意義が付与されているという事実なのである。

第1章では、「ラジオの権威と流行歌放送」(1933)を出発点として、「ジャズについて」(1936-37)から『ヴァーグナー試論』(1937-38)を経て、『啓蒙の弁証法』に至るまでのアドルノの物象化批判を、「殴打 (Schlagen)」という形象を中心に概観したうえで、さらに、「レコードのフォルム」(1934)と『音楽演奏の理論のために』(1946-59)をもとに、アドルノの物象化論が、メシアニズム的な契機をも内含していることが明らかとされる。

第2章は、アドルノのベンヤミン宛書簡におけるカフカのオドラデクについての言及部分を中心に、商品経済体制のなかで徹底的に疎外・物象化された商品の〈救済〉の可能性をめぐる議論を再構成する。つづいて、「音楽の社会的状況によせてI」のクルト・ヴァイルの「シュルレアリスム音楽」についての記述をもとに、モンタージュ技法のなかにアドルノが、〈^{シュラフト}文字〉的な布置状況を現出させる機能を見出していたことが示される。

第3章は、『ヴァーグナー試論』から『啓蒙の弁証法』へと至る1930年代後半から1940年代前半までの時期におけるアドルノの思想のなかで、「イメージ=映像 (Bild)」と〈^{シュラフト}文字〉が占めるポジションを跡付けていくことが試みられる。

第4章では、南カリフォルニア亡命期におけるアドルノの映画との関わりを検証したうえで、アドルノ/アイスラーによる『映画のための作曲』(1943-44)における映画音楽の批判的変革をめぐる議論の理論的・実践的な射程が究明される。

補論①では、1940年代半ばにおける社会研究所の大衆メディアとのさまざまな取り組みについて考察するべく、戦時体制下のワシントンにおける社会研究所のメンバーの活動、アドルノのファシスト煽動家のラジオ演説分析、それにホルクハイマーが主導した反ユダヤ主義調査映画計画について考察される。

補論②においては、『映画のための作曲』の出版をめぐる経緯を追うなかで、アイスラーおよびリッツ・ラングとアドルノとの戦後の関係について跡づけられる。

第5章では、1950年代に執筆されたアドルノのテレビ論を、社会心理学的なモチーフに着目しつつ考察することによって、〈アウシュヴィッツ以後〉における表象メディアとしてのテレビの機能にたいするアドルノの分析が検証される。

第6章においては、〈ニュー・ジャーマン・シネマ〉の活躍に触発されるかたちで1966年に発表された「映画の透かし絵」をもとに、晩年のアドルノが萌芽的なかたちで構想した映画美学について検証していくなかで、映画メディアのなかに最晩年のアドルノが看取した美学的な可能性について明らかにするとともに、〈知覚媒体〉としての芸術作品という観点から、アドルノの美学理論の新たな射程を引き出すことが試みられる。